

## 主 文

本件各上告を棄却する。

## 理 由

被告人兩名弁護人加藤晃の上告趣意は、「原判決ニ依レバ被告人A、同B、原審相被告人C同Dモ前記ノ兇器ヲ携ヘ相前後シテ屋内ニ侵入シタ上EハF以下家人十名ヲ同家表十畳ノ間ニ集合サセテ日本刀ヲ差付ケ「自分達ハ共産党ノ者デニ、三ヶ月前ニ大阪カラ来タ、二十日余モカ、ツテオ宅ニ隠匿物資ノアルコトヲ調査シテイル、倉庫ニ案内シテ呉レ」ト言ツテ脅迫シテイル時被告人Hモ表入口カラ侵入シテ来テ家人ニ対シテ持ツテイル手榴弾ヲ投付ケルヨウナ氣勢ヲ示シナガラ、「騒グト危イゾ」ト言ツテ共ニ脅迫シ因テ家人ヲ怖レサセテソノ抵抗ヲ抑圧シタ後被告人Hハ家人ヲ監視シEハFヲ促シテ同家ノ倉庫ニ案内サセテ之ヲ開ケサセルト共ニ同人ヲ監視シソノ間被告人A同B原審相被告人C同Dノ四名ハ福岡県食糧課ノ委託ニヨツテFガ保管中ノ同倉庫内ニアツタ牛肉ノ缶詰七十一梱（一梱八十個入）ヲ持出シ之ヲ待タセテイタトラックニ積込デ持退リ、共同シテ強取ノ目的ヲ遂ゲ云々」ト判示シ刑法第二百三十六條第一項同第六十條ヲ以テ処断シテイルノデアルガ被告人Hガ福岡地方裁判所予審廷ニ於テ予審判事藤井亮ニ対シテ為シタル第二回予審訊問調書中問七ノ答（四四五丁）ニ於テ「尚家人ガ騒ギソウニ思ハレタノデ私ハポケットトカラ手榴弾ヲ取出シテ右手ニ持ツテ夫レヲ家人ノ方ニ差出シ乍ラ騒グト危イゾト脅シ付ケタラ老主人ガ次ノ間ノ電燈ヲ消シ家人十名ハ一塊リニ集ツタノデス此ノ時若主人ガ私ニ紳士的ニ出テ居ルノダカラ騒グコトハ要ラヌト申シマシタ此ノ紳士的ト云フ意味ハEガ紳士的ニ出テイルト云フ意味ト解シマシタガ私モ別ニ騒イデ居タ訳デナク只手榴弾ヲ持ツタ手ヲ差出シテ脅シタノデシタカラ別ニ騒イデハ居ラヌト申シテカラ引キ続キ君達ダケ美味イ物ヲ食ツテ良イカ君達ダケ贅沢シテ居レバ良イノカト可成大声デ申シタラ若主人ハ自分達ハ何モ贅沢シテ居ラヌト返答シマシタ然

シ私ハ引続イテ町ノ大勢ノ者ハ食べ物ハナクテ困ツテイルガ判ツテ居ルカオ前ノ家ニハ隠匿物資がアラウガト云ウト若主人ハ隠匿物資ハ無イト答ヘマシタ夫レカラ私ハ無イ筈ハ無イ干バナナヤ葡萄ガアロウガーケ月位前ニトラツクデニ台持出シテ居ロウガト云フテ居ツタラEガ傍カラ私ニ親爺サン話ガ出来テ居ルノダカラモウ良イト申シタノデ問答ハ打切ツタノデス」ハ問「夫レカラ怎ウシタカ」答「夫レカラEガ若主人ニ倉庫カラ表道路ニ通ズル処ノ扉ヲ開イテ呉レト言ヒ若主人ガ何処カカラ取出シタ鍵ヲ持ツテEト共ニ此ノ扉ノ処ニ行キ其ノ扉ヲ開イテカラ若主人ノ案内デE、A、C、D及Bガ裏ノ倉庫ノ方ヘ行キマシタガ私ハ残ツテ家人ヲ監視シテ居ツタノデス云々」ト供述シ被告人Iモ同様予審廷ニ於テ供述シ証人F同Jモ同様ノ趣旨ヲ証言シテイルノデアリマスガ右ノ事実ニ於テ被告人H、I等ノ為シタル脅迫行為ハ被害者タルF、同Jニ対シテ恐怖ノ念ヲ起サシメ以テ其ノ抵抗ヲ抑圧セシメル程度ニ非ザルコトハ明瞭デアリ且贓品ハ總テ右Fノ任意提出シタルモノナル事同人ノ予審廷ニ於ケル証言ニ就テ見ルモ明ラカデアル從ツテ本件ハ強盗ニ非ズシテ恐喝ニ依リ財物ヲ交付セシメタルモノニ該当シ從ツテ刑法第二百四十九条第一項ヲ適用スベキモノデアル之ニ対シ原判決ニ於テ、刑法第二百三十六条第一項ヲ適用シタノハ失当デアリ刑事訴訟法第四百九条ノ法令ノ違反アルモノデアル從ツテ原判決ハ破毀セラルベキデアル」というにある。

しかし、原判決は、その第二の事実として、被告兩名は、他の五名の者と共謀の上、被告人Hは手榴弾を、被告人Aは日本刀を、其の他の者は日本刀、登山用ナイフ、ボール等を携えて判示の日午前一時半頃トラックに乗つて被害者方に到着し、被告人兩名外四名は相前後して被害者方屋内に侵入しその判示のごとく、或は日本刀を差し付けて家人を脅迫し殊に被告人Hは、手榴弾を投付けるような氣勢を示して脅迫し、家人の抵抗を抑圧した上、共同して判示かん詰七十一こおりを持出した事実を認定し、之に対し刑法第百三十条第二百三十六条等を適用したものであつて、

右事實は原判決の引用した証拠に依り充分認め得られるところであり、このように深夜数人兇器を携えて屋内に侵入して判示のような脅迫行為をしたときは、通常被害者において反抗を抑圧せられる程度の畏怖を感じることは明瞭であるから、原判決がその行為を強盗と認定し之に対し強盗の法条を適用したのは正当であつて何等の違法はない。所論はみだりに自己に都合のより証拠の一部を引用して原判決の認定と異なる事実を主張し、引いて原判決の法律適用を攻撃するものであるから採用することはできない。論旨は理由がない。

被告人H弁護士林達也上告趣意は「原審判決は証拠を十分調べなかつた遺脱がある。上告人は軍の隠退蔵物資摘発生活窮乏者に分与するのが本件の目的である事に争いはない。然るに、軍の隠退蔵物資なるや否や（本件強盗の目的物）につきて証拠上明瞭にされて居ない。記録上、被害者が自分の所有物に手をつけるな、とか又素直に恐怖程度低くて任意、蔵の「かぎ」で蔵を開いたとか散見し寧ろ隠匿物資のほひも高い、隠匿物資なら刑の量刑も亦重過ぎると思ふ」というにある。

しかし、所論の被害物件が隠退蔵物資なりやは被告人の本件犯行の動機目的に存する主観に過ぎないものであるから、これを証拠に依り客観的に確定する必要はない。従つて、これを証拠上明瞭にしなかつたからといつて、所論のような違法があるといふ得ないし、其の他刑の量定に関する主張は適法な上告の理由とならないものであるから結局本論旨は全部理由がない。

よつて、刑事訴訟法第四百四十六条に則り主文の通り判決する。

右判決は裁判官全員の一致した意見である。

検察官松岡佐一関与

昭和二十二年十一月二十四日

最高裁判所第一小法廷

裁判長裁判官

斎

藤

悠

輔

裁判官	沢	田	竹 治 郎
裁判官	真	野	毅
裁判官	岩	松	三 郎